

平成27年度～28年度（2015～2016年度）外国語教育 部門活動報告

雑誌名	外国語教育論集
巻	39
ページ	159-184
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00145984

平成 27 年度～ 28 年度（2015 ～ 2016 年度） 外国語教育部門 活動報告

CEGLOC 外国語教育部門長 臼 山 利 信

2015 年 4 月にグローバルコミュニケーション教育センター（CEGLOC）が発足し、2 年目を終えようとしている。旧外国語センターを引き継いだ CEGLOC 外国語教育部門は、平成 27 年度から平成 28 年度にわたって、英語セクション、初習外国語セクション（ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、朝鮮語）ともに教育の質を保証していくための取り組みに真剣に取り組んだ。

以下に外国語教育部門の主な取り組みをまとめ、活動報告として紹介する。

1. 平成 27 年度（2015 年度） CEGLOC 外国語教育部門 実績報告
2. 平成 28 年度（2016 年度） CEGLOC 外国語教育部門 活動報告
3. 平成 28 年度（2016 年度） 公開講演会および学術講演会の記録と要旨
4. 平成 28 年度（2016 年度） 海外研修記録

平成 27 年度（2015 年度）実績報告書

CEGLOC 外国語教育部門

1. 概況

CEGLOC 発足の年であり、再編に伴い新組織移行に係る一定の混乱が予想されたものの、再編上の問題は特に生じなかった。年々実施されている非常勤講師枠の削減や定年退職による人員削減などに対して、英語セクションおよび初修外国語の各セクションは、カリキュラム上の工夫による合併クラスの組織や関係教員による献身的かつ相補的なバックアップ体制などにより、授業運営に支障をきたすことなく適切に対応した。また海外語学研修にも力を入れた。さらに全学的な教育施策として実施している TOEFL 対策講座についても強い責任感を持って着実に取り組んだ。

全体として、学生に対する教育の質保証という意味で、前年度に劣らないパフォーマンスを維持できたと総括できる。したがって、平成 27 年度についても、本学の「教養教育スタンダード」の理念と目標に則った外国語教育活動を展開できたと考えている。

2. 教育

英語教育については、CALL システムを活用した授業を推奨し、積極的に展開した。CALL 設備をより効率的かつ効果的に運用し、マルチメディア教材や e-ラーニング教材を導入した授業を行うための教員研修を行った。また、1 年次対象必修科目である「異文化と英語」の教授法を巡って FD 研修会を実施した。こうした取り組みは、CEGLOC の英語教育の質を高い水準で維持していく上で極めて有効である。

単位取得を伴う海外語学研修では、夏期に英語研修（オックスフォード大学）、ドイツ語研修（バイロイト大学）、中国語研修（湖南大学）、ロシア語研修（ロシア・サントペテルブルグ大学）が例年どおり実施されたことに加え、アラビア語研修（モロッコ・アル＝アハイン大学）と二つのロシア語研修（キルギス・キルギス民族大学 在キルギス日本人材開発センター）が新規に行われた。また春期でも中国語研修（上海華東師範大学）のほかに、新たに三つ目のロシア語研修（カザフスタン・カザフ国立大学）が実施された。いずれの取り組みも国際舞台で活躍するための実践的コミュニケーション能力を伸ばす教育活動であり、本学が目指すグローバル人材育成に寄与するものである。

3. 研究

CEGLOC 外国語教育部門の定期学術誌である『外国語教育論集』第 38 号を刊行した。その中で 4 本の研究論文と 3 本の研究ノートが発表された。

ロシア語セクションから『日本人のためのベラルーシ語入門Ⅰ』（監修：白山利信、著者：タッチャーナ・ラムザ、清沢紫織）を刊行した。本書はベラルーシ本国のテレビ・ラジオ・新聞・雑誌などのマスメディアで大きく取り上げられ、社会的に高い評価を得た。

CEGLOC 開設記念公開講演会・シンポジウムを2015年6月15日に盛大に開催した。招聘講師の高田康成氏（東京大学名誉教授・元東京大学グローバルコミュニケーション研究センター長）の講演、同氏を中心とした学術的討議を行った。同氏の指摘した「日本の近代化の歴史を踏まえたトライリンガル教育の導入・定着・強化、世界の多様性と日本の地政学的戦略性に配慮した言語教育の必要性」は、CEGLOC 外国語教育部門の目指すべき方向性という意味で、有益な視座に成りうるものと考えられる。

4. 社会連携

ロシア語セクションでは、海外語学研修先をロシア連邦に加えて、旧ソ連地域でロシア語圏諸国であるキルギスとカザフスタンでのロシア語研修を実施できる体制を構築した。それを踏まえて、海外語学研修用の教材開発に着手し、現地の社会事情や文化事情を教材の内容に反映させる目的でその具体的な助言を得るために、CEGLOC 共同研究員として、外務省欧州局中央アジア・コーカサス室長の七澤淳氏を招聘した。こうした外務省との教育実務上の連携は双方にメリットがあり、社会連携の一つのモデルとなり得る。

5. その他の業務運営等

CEGLOC 技術支援室（野田恵美子技術職員）が中心となり、ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンターのアクセシビリティ部門と協力して、外国語教育部門で授業を担当する教員向けの障害学生支援パンフを作成し、刊行した。そのパンフには、視覚障害を持つ学生、聴覚障害を持つ学生、運動・内部障害を持つ学生、発達障害を持つ学生と、障害のタイプに応じた具体的な支援が示されており、障害学生が通常授業に参加する際に教員にとって大きな手助けとなるものである。その意味で、実用性と啓発性を兼ね備えた貴重な障害学生支援ガイドであり、本学のみならず、他大学でも活用可能な極めて汎用性の高いものとなっている。

6. 課題と展望

毎年のように定年退職者や転出者が出る中、人的な補充がないという人文社会系の方針に沿った授業運営、組織運営が求められている。非常に厳しい時代である。したがって、これまで以上に創意工夫をしながら、外国語教育部門関連の業務を簡素化し、効率化していく必要がある。

また、経費削減のもとで、英語および初修外国語の教育実施体制を維持し、教育の質保証についても担保していかなければならない。これまでどおりの人員配置

や条件などについても、戦略的・長期的な見地から可能な範囲で見直していくことが今後必要になるかもしれない。

CEGLOC は、人文社会系の下部組織としての位置付けから常に物事を発想していかねばならないが、全学的な経費削減の流れの中で、CEGLOC 外国語教育部門に所属する教員としての役割と、人社系において教員各自が関係する教育組織での役割を明確にしながら、無理のない、均衡の取れた働き方を模索する必要がある。

経費削減に対抗する措置の一つは、外部資金の獲得である。決して容易なことではないが、そのための努力が重要である。またエクステンションプログラムを活用した公開講座の展開も具体的な視野に入れる必要があるかもしれない。今後の大きな課題である。

いずれにしても、激しい時代変化、社会変化を見据えながら、そしてその時代潮流の只中にある大学（学内）の変化の波を見極めながら、常に本学の教養教育の理念・目標を踏まえ、中長期の目標、短期の目標を明確にして、外国語教育のミッションを遂行していくことが大切である。

2016 年度（平成 28 年度）活動報告

1. 教育

- (1) 新入生英語プレースメントテスト（4月8日）
- (2) 春学期期末試験（AB モジュール 6月28日～7月4日）
（ABC モジュール 8月3日～8月9日）
- (3) ドイツ語研修（バイロイト大学、8月2日～8月26日 5名）
- (4) 中国語研修（湖南大学、8月26日～9月12日 6名）
- (5) 英語研修（オックスフォード大学、8月28日～9月17日 12名）
- (6) フランス語研修（グルノーブル大学・サンテチエンヌ大学、8月29日～9月23日 5名）
- (7) ロシア語研修（サンクトペテルブルグ大学、9月3日～9月26日 4名）
- (8) ロシア語研修（キルギス民族大学・キルギス日本人材開発センター、9月1日～9月24日 3名）
- (9) 2学期入学者プレースメントテスト（9月29日）
- (10) 秋学期期末試験（AB モジュール 12月16日、12月22日～12月28日）
（ABC モジュール 2月9日～2月15日）
- (11) ロシア語研修（カザフ国立大学、2月18日～3月11日予定）
- (12) フランス語研修（サンテチエンヌ大学、2月27日～3月24日予定）
- (13) 中国語研修（上海華東師範大学、3月3日～3月27日予定）

*担当教員不在のため、アラビア語研修は実施せず。

2. 会議・委員会

- (1) 外国語教育部門担当者連絡会議（4月6日、5月11日、6月1日、7月6日、10月3日、11月2日、12月7日、1月11日、1月27日（メール審議）、2月8日（予定）、3月1日（予定））
- (2) 外国語教育部門人事計画室会議（4月6日、5月25日、6月22日、7月27日、10月26日、11月2日（臨時）、30日、12月28日、1月19日（臨時）、25日（メール審議）、2月22日（予定）、3月22日（予定））
- (3) 外国語教育部門会議（4月27日、1月19日）
- (4) CEGLOC 企画調整部門会議（4月6日、4月21日（メール審議）、5月11日、6月1日、7月6日、8月30日（メール審議）、9月5日（メール審議）、10月5日、10月11日（メール審議）、10月21日（メール審議）、11月2日、12月7日、1月11日、2月8日（予定）、3月1日（予定））
- (5) CEGLOC 運営委員会（4月20日、11月2日）
- (6) CEGLOC 全体会議（6月1日、12月7日）
- (7) ホームページ管理委員会（7月1日、7月6日）

- (8) 『外国語教育論集』編集委員会（7月6日、10月5日、11月16日、11月30日）
- (9) 検定運営委員会（7月29日）

3. 平成28年度「教育戦略推進プロジェクト支援事業」

- (1) 第3回トライリンガルデー（ドイツ語・フランス語・スペイン語）
 テーマ：ゲームをしながら、三言語を学びましょう！
 日時：2017年1月18日
 オーガナイザー：小松祐子（筑波大学准教授）
 協力教員：武井隆道（筑波大学教授）、シュミット マリア（筑波大学准教授）、
 ジャクタ ブルノ（筑波大学助教）ほか

4. 研究大会

- (1) 外国語教育メディア学会 関東支部 第137回 研究大会(CEGLOCとの共催)
 大会テーマ：CLILの現在と今後—日本におけるCLILの実践を考える—
 日時：2016年12月10日
 会場校責任者：小野雄一（筑波大学助教）

5. 講演会

- (1) 2016年度CEGLOC主催 新入生に贈る公開講演会
 題目：グローバル時代を生きるためのヒント
 日時：2016年5月12日
 講師：白山利信（筑波大学教授）
- (2) 第6回 公開講演会「激動のグローバル世界に挑む」（Ge-NISプログラムとの協力）
 題目：極東開発とロシア
 日時：2016年12月21日
 講師：徳永昌弘（関西大学商学部教授）
- (3) 第7回 公開講演会「激動のグローバル世界に挑む」（Ge-NISプログラムとの協力）
 題目：コーカサスの歴史と文化
 日時：2016年12月22日
 講師：Konstantine TSERETELI（トビリシ自由大学大学教授）
- (4) 第8回 公開講演会「激動のグローバル世界に挑む」（Ge-NISプログラムとの協力）
 題目：はじめての国際マナー
 日時：2017年1月23日
 講師：堺 真理子（人材開発コンサルタント）
- (5) 第9回 公開講演会「激動のグローバル世界に挑む」（Ge-NISプログラムとの

協力)

題目：変化するグローバル社会を生きるためのキャリアデザインと能力開発

日時：2017年2月7日

講師：當作 靖彦（カリフォルニア大学サンディエゴ校教授）

- (6) 第10回 公開講演会「激動のグローバル世界に挑む」(Ge-NIS プログラムとの協力)

題目：北方領土問題の行方

日時：2017年2月13日

講師：大野正美（朝日新聞記者）

6. FD 研修会

- (1) 第5回 CEGLOC 外国語教育部門 FD 研修会（ワークショップ）
 テーマ：Foreign Languages as Academic subject & Communication Tool
 日時：2016年7月9日
 オーガナイザー：ジャクタ ブルノ（筑波大学助教）
- (2) 第6回 CEGLOC 外国語教育部門 FD 研修会（パネルディスカッション）
 テーマ：授業でうまくいかないこと Motivation & students
 日時：2016年11月8日
 オーガナイザー：ジャクタ ブルノ（筑波大学助教）
- (2) 第7回 CEGLOC 外国語教育部門 FD 研修会
 テーマ：外国語教育における動機づけ
 日時：2016年1月17日
 オーガナイザー：ジャクタ ブルノ（筑波大学助教）

7. 留学説明会

- (1) フランス語留学説明会
 日時：2016年4月13日、10月19日
 担当：小松祐子（筑波大学准教授）、ジャクタ ブルノ（筑波大学助教）
- (2) フランス語相談会
 日時：2016年6月29日
 担当：小松祐子（筑波大学准教授）、ジャクタ ブルノ（筑波大学助教）

8. TOEFL

- (1) TOEFL テスト説明会
 日時：2016年4月20日、4月25日、5月18日、10月12日、11月11日
 担当：山田なほみ・木村裕美（CEGLOC 事務室）
- (2) 学群1年次対象 TOEFL ITP の実施
 日時：2016年5月21日

- 担当：山田なほみ・木村裕美（CEGLOC 事務室）他
- (3) 学群 3 年次対象 TOEFL ITP の実施
日時：2016 年 6 月 11 日
担当：山田なほみ・木村裕美（CEGLOC 事務室）他
- (4) 人文・文化学群、社会国際学群対象 TOEFL ITP の実施
日時：2016 年 11 月 30 日
担当：山田なほみ・木村裕美（CEGLOC 事務室）他

9. 見学受入

- (1) 栃木県立茂木高等学校総合学科 2 年
日時：2016 年 5 月 20 日
- (2) 岩瀬日本大学高等学校普通科特進コース 2・3 年
日時：2016 年 6 月 3 日
- (3) 栃木県立さくら清修高等学校総合学科 2 年
日時：2016 年 6 月 17 日
- (4) 東京都立北園高等学校普通科文系 2 年
日時：2016 年 7 月 14 日
- (5) 群馬県立沼田高校普通科 2 年
日時：2016 年 7 月 19 日
- (6) 新潟県立柏崎翔洋中等教育学校普通科 2 年
日時：2016 年 7 月 26 日
- (7) 栃木県立宇都宮中央女子高等学校普通科 1～3 年
日時：2016 年 8 月 25 日
- (8) 土浦日本大学高等学校普通科特進コース
日時：2016 年 8 月 25 日
- (9) 栃木県立栃木女子高等学校普通科 1 年
日時：2016 年 10 月 21 日
- (10) 福島県立福島東高等学校普通科 2 年
日時：2016 年 10 月 26 日
- (11) 叡明高校普通科 1・2 年
日時：2016 年 12 月 7 日
- (12) 水城高校普通科 2 年
日時：2017 年 3 月 6 日（予定）
- 上記 12 校の受入担当：野田恵美子（CEGLOC 技術職員）

講演会報告

新入生に贈るグローバルコミュニケーション教育センター (CEGLOC) 主催公開演会を開催

平成 28 年 5 月 12 日 (木)、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター CA410 において、新入生に贈るグローバルコミュニケーション教育センター主催公開講演会「グローバル時代を生きるためのヒントー言語能力と文化理解力を高めることで見えてくるものー」(講師：臼山利信 CEGLOC 外国語部門長・人文社会系教授)を開催しました。

本講演会は、2006 年度から 2014 年度までは外国語センター主催で開催、昨年度からはグローバルコミュニケーション教育センター (CEGLOC) 主催で開催している恒例行事です。

講演者の臼山外国語部門長は、まず文化とは人間集団が生みの営みの中で創りあげてきた価値体系であること、そして文化理解とは当該人間・集団が是とする価値観を知り認め、この世界は価値観の異なる人間集団が無数に存在する場所だと認識すること、さらに多種多様な文化世界へのアクセスには外国語の習得が必要不可欠であることなどを、時にユーモアを交えながら講演しました。

最後に、講演者から聴講した新入生に対して、①高いレベルでの外国語運用能力を獲得は、それ以上に高いレベルにある国語(日本語又は母語)運用能力の存在を前提としているため、国語の大切さを常に意識して、日本語(又は母語)で表現し伝達するための言語技術を磨き続けてほしい、②頭で理解したことと実際にできることは大きく異なるので、何度も失敗を重ねて試行錯誤し自身の目標に近づいてほしい、とのメッセージを贈りました。

講演会には 60 名を超える聴衆の参加があり、盛会のうちに終了しました。



講演する臼山教授



講演会の様子

FD 研修会報告

第五回 CEGLOC 外国語教育部門 FD 研修会： 学問およびコミュニケーション・ツールとしての外国語

19 July, 2016

9:15-11:15am CA304

The Fifth Faculty Development Workshop: Foreign Languages as Academic subject & Communication Tool

This semester's faculty development workshop was extended from the English Section to the whole Foreign Language Education Division with the intent to include instructors of all 9 foreign languages taught at CEGLOC. This enhanced event also featured for the first time junior researchers. The event comprised two distinct topics: I. Foreign Languages as an Academic subject, and II. Foreign Languages as a Communication Tool. The first topic included a talk on ongoing education in the field of professional translation from Japanese to English/Dutch and brief presentations from junior researchers who introduced their current research. The second topic addressed teaching practices of Arabic and French for beginners.

List of presenters:

- 1) Abir Kawakami: 'Instant Arabic' Alphabet & associative learning
- 2) Jeroen Bode: 'Education never ends' Language acquisition post-academia
- 3) Junior researcher corner. Eiko Suita, Kazuya Nishimaki, Ai Sato: 'Self-intro'
- 4) Bruno Jactat: 'Stand and Talk'. Communication strategies from the start



From left clockwise, A. Kawakami, J. Bode, A. Sato, E. Suita.

(文責：ジャクタ)

THE UNIVERSITY OF TSUKUBA – CENTER FOR
EDUCATION OF GLOBAL COMMUNICATION
THE SIXTH FACULTY DEVELOPMENT EVENT
PANEL DISCUSSION: WHAT DOESN'T WORK IN CLASS?

8 November, 2016
9:30-11:30am CA304

Toshinobu Usuyama, head of the Foreign Language Education Division at CEGLOC, introduced this event which consisted of two parts.

Part I: Panel discussion. Panelists took turns presenting an issue they were faced with in their language classes and some of the solutions they have tried to implement.

Part II: Group work. After the coffee break panelists broke into groups with 3 or 4 members from the audience and furthered the discussion to come up with solutions and suggestions. A secretary in each group recorded the ideas and wrote up a one page summary which has been published hereafter.



From left clockwise, head of FLED Toshinobu USUYAMA (Japan), moderator Martin PAULY (USA), panelists Roxana SANDU (Romania), Adiene SUSEJ ROQUE (Venezuela), Eisuke KAWADA (Japan), Maria Gabriela SCHMIDT (Germany).

Bruno Jactat

Introductory speech

“Thank you very much for gathering here today to participate in Faculty Development Panel Discussion of Foreign Language Education Division under the topic “What doesn’t work in the foreign language class?”

This topic is very important for today’s foreign language teachers in the ICT era when distance education is rapidly developing and expanding. However, I believe that an indirect education using ICT cannot surpass face-to-face instruction, which is the most effective education that can be provided in class, especially in the area of language learning. I am convinced that face-to-face education in class has always been a powerful means of transmitting knowledge and skills anytime, anywhere and in any era, and it will continue to possess the same power in the years to come. Hence, in my opinion, the question “What doesn’t work in the foreign language class?” will always remain a relevant topic for teachers.

Each classroom has its’ given conditions, for example, class size and learning levels of students, their personalities and their cultural backgrounds, their willingness to learn and motivations for learning, gender ratio and total learning time, quality of education, equipment, materials, etc. And likewise, there are also many parameters related to the teachers’ side. I would like to emphasize here that problems in foreign language education in class can be of individual and universal nature.

Today we have four panelists and a moderator, each an excellent specialist in his or her field of foreign language education from different cultural backgrounds of Romania, Venezuela, Japan, Germany and the USA. I hope that their presentations and discussions that will follow will give some new points of view to all teachers here towards improvement of their teaching methods.

Finally, I strongly believe that Faculty Development activities like today’s event will be very meaningful and fruitful for exploring new possibilities of foreign language teaching methodology in the new era.

Thank you very much for your kind attention.”

Toshinobu Usuyama

Name of Panelist	Eisuke Kawada
Name of Secretary	Grant Black
Names of other members	Bruno Jactat, Martin Pauly
Name of issue	Do We Need Equality or Diversity, or Both?
What solutions and ideas are suggested regarding this particular issue?	
<p>Eisuke Kawada explained his concern for fairness in teaching based on the idea of giving each student an equal amount of attention and teaching time. When a class has the combination of high student numbers (over 30) and a wide range in student ability levels, then managing the instructor time-per-student ratio is a challenge.</p> <p>The group first discussed this idea as representing a coaching approach to teaching. We noted that following from the Teaching Perspectives Inventory, good teaching may look quite different depending on the teacher's character and his teaching perspective. Hence the group initiated articulating on the idea of equality in teaching, perhaps referring to an equality of accessibility and opportunity: all students are given equal access to the instructor's attention; all students are given equal opportunity for self-improvement and learning gains. The discussion noted that the pre-requisite to equality of accessibility and opportunity on the student side might be a clear specification of availability on the part of the teacher.</p> <p>Through such perspective, the group reached a general agreement that setting and defining from the outset in a clear and simple way the teacher's expectations and availability could help students seize the opportunity for equal accessibility. The idea noted here in the group discussion is that student motivation is not equal. Students come to the classes with different needs, but also with different aspirations. That is to say, student needs and expectations for instructor time may vary greatly depending on student motivation and learning aspirations.</p> <p>Another concern we noted for fairness in teaching is the question of standards for levels of coursework or for student learning outcomes. Although the course catalog lists all language courses of the same name with an identical course description, in practice each course is entirely unique with no unified standards applied for levels of coursework, student learning outcomes or any other educational measurement. This may be true even for courses of the same name taught by the same instructor due to classes being assigned by major and ranking, e.g. the same course title "English Integrated Skills" in a class for Medical A-level students and a class for P.E. C-level students will necessarily be dissimilar. The gap between student types is dramatic and incongruent.</p> <p>Necessarily, the group discussed the problem of diversity. Given the diversity of student levels aligned with a lack of educational standards, we speculated the question: how do we maintain the integrity of equality across courses (or instructors) in evaluating student performance? Though the group could not reach a resolution on this topic, it seemed evident that a curriculum which has a wide diversity in student levels without clear standards is founded on inequality. While perhaps, unintentional, such a curriculum assures that evaluation of student performance will be inconsistent and therefore incompatible with the idea of fairness in teaching.</p> <p style="text-align: right;">Grant Black & Eisuke Kawada</p>	

Name of Panelist	Roxana Sandu
Name of Secretary	Pramila Neupane
Names of other members	Bode Jeroen, Ryoko Fujita, Sudha Neupane
Name of issue	Teaching mixed ability EFL classes
What solutions and ideas are suggested regarding this particular issue?	
<p>Following Sandu's panel discussion on the challenges faced when teaching multilevel EFL classes, we shared ideas based on each member's experience and attempted at bringing together new ways of dealing with this pressing issue.</p> <p>First, Sandu explained the meaning of mixed ability or mixed level classes taking into consideration her current situation. In some of her classes, there are students with native like fluency who are either of mixed race, international students, or Japanese students who studied abroad in high school, and on the other hand, Japanese students who are not being able to clearly express their thoughts in a complete sentence. Henceforth, she divided her classes in groups of four, based on students' language proficiency to facilitate communication among students with similar language abilities. This decision has been taken following students' feedback where some of the high proficient students complained of having to always take the lead in classroom activities. Although this setting is still experimental, all the students were found to interact more than before, when the class was randomly divided into groups. We all concluded that this type of setting could motivate low-ability students to perform better. Moreover, high-proficiency students do not get bored and low-proficiency students do not feel intimidated by the better-performing students.</p> <p>Another type of group work we have talked about is one conducted using the CALL system in which students are randomly divided into groups. Once the group members are decided, the students divide the responsibilities among themselves. The group selects a note taker and a presenter either voluntarily or by "rock, paper, scissors." Other students in the group take part in the discussion, look for new information on the Internet, look up the meaning of new vocabulary, and so on. In this setting, group members have all the power and freedom regarding how to conduct the group work, so they are entirely responsible for the results. This way, they collaborate and learn from each other.</p> <p>We also discussed the importance of giving a clear explanation about how active participation in the group is essential for improving overall English proficiency and achieving a higher grade. It is also important to highlight the grading criteria in the syllabus and clarify it in the first class so that it motivates students to stay active during the group sessions. One participant suggested that providing individual support to low-motivated or low-proficiency students could also encourage them to actively take part in class activities.</p> <p>The case of differentiated instruction, as in differentiated tasks and assignments was also brought up by one participant who is using this approach in a reading class. Based on a placement test using the CEFR framework administered at the beginning of the semester, students were given different reading assignments suitable to their language proficiency level. Such differentiated assignments could solve some of the common problems encountered in mixed-ability classes.</p> <p>Remaining questions or issues.</p> <p>How can we test and grade students in mixed-level classes in a fair way?</p> <p style="text-align: right;">Pramila Neupane & Roxana Sandu</p>	

Name of Panelist	Adiene Roque
Name of Secretary	Thomas Mayers
Names of other members	Kazuya Nishimaki, Javier Salazar, and Gabriela Schmidt
Name of issue	The Small Class Vs. the Big Class: the Spanish class case
What solutions and ideas are suggested regarding this particular issue?	
<p>In her presentation, Professor Roque raised a number of issues regarding the challenges of teaching large and small groups of students. The dynamics of a small class differ greatly from that of a large class. The panel discussion that followed focused primarily on the problems related to large classes and had two objectives: 1) to share ideas about methods to be applied in large classes which may facilitate the language teaching and learning, and 2) provide personal examples culled from actual experience and furnish some guidance to facilitate the teaching and learning process in large classes.</p> <p>Among the questions raised that was discussed in the preceding panel discussion was “what we should do when students are shy, or because of their culture, do not participate in class?” and how can we provide the students with more opportunities to express themselves?” All of the participants in the discussion testified to having difficulty in encouraging students to overcome their shyness or cultural barriers in order to express themselves in class. As a solution to tackle this issue one participant suggested putting the students into small groups for discussion. Another participant suggested that choosing the right topic for discussion is also important; the topic must be relevant and interesting for the students. Group work can be followed up by presentations from each group. The groups could elect a representative (or decide by “rock, paper, scissors”) who will stand up and surmise the group’s discussion and opinions. Another participant highlighted the importance of having the students practice equality in class—all students should contribute to the activities in class.</p> <p>Professor Roque also raised an issue about the management of large classes explaining: “we need a lot of time for non-academic activities related to the management and control of discipline.” In the discussion we talked about the time taken up by administrative duties, such as taking the attendance and collecting/ returning assignments. Regarding taking the attendance, one participant suggested that rather than taking a class roll call, which can be time consuming in a large class, it is quicker to assign each student a seat on the first day of term. The instructor can then take a quick visual attendance—making the empty seats as student absences. Another participant suggested that the attendance could be taken in the traditional roll call way while students are working on a quiet individual activity such as writing or reading exercises. In this way the attendance does not use any of the classroom time. One objection to this method is that the attendance should be taken at the beginning of class, to encourage student punctuality.</p> <p>Regarding the collection of assignments, one participant suggested sending a clear-file folder around the room into which students place their assignments. As for returning assignments to students, the teacher could simply delegate this role to two or three students. As a solution to the issue of discipline in a large class all of the participants pointed to the importance of establishing routines within a class. Routines create a rhythm and cohesion for a class from week to week and thereby create a learning environment in which students know both what to expect and what is expected of them.</p> <p>Remaining questions or issues.</p> <p>Professor Roque also suggested that “noise in large classes, has a negative impact on teaching and learning outcomes.” This issue of noise perhaps comes under the broader category of discipline, but was not dealt with specifically in the panel discussion.</p> <p style="text-align: right;">Thomas Mayers</p>	

Name of Panelist	Maria Gabriela Schmidt
Name of Secretary	Javier Salazar
Names of other members	Adiene Roque, Thomas Mayers, Kazuya Ishimaki
Name of issue	Pros and Cons of using L1, L1+L2 or L2
What solutions and ideas are suggested regarding this particular issue?	
<p>In our group, we mostly reinforced and agreed with the main points of the presentation. Without giving any particular preference to any of the three teaching styles in question (L1 only, L1+L2, and L2 only) there was a clear tendency in the group to underline the situational benefits of each style. However, we also implicitly agreed that the use of L1 at least in a minimal level is beneficial because:</p> <ul style="list-style-type: none"> - Sometimes the metalanguage of the instructions of certain textbook exercises and class activities are too complex for students to understand. Even if the content to be studied is easy for the students, if they don't understand what they are supposed to do on an exercise or activity it will hinder their progress, engagement and motivation. Thus, using L1 is recommended for explaining the class rules, exercise/ activity procedures, etc. - L1 is also very useful for explaining the pragmatics and cultural nuances of L2. In this sense, using L1 for emphasizing the importance of interpreting the body language/gestures of L2 natives is also better, as it would open up opportunities for the instructor to draw parallels between the students' cultural point of reference and that of L2 natives. - For students to see that their instructor is making an effort to communicate with them in their L1 could constitute a motivational tool for them. Moreover, it is also helpful if they learn about the instructor's experiences and struggles learning a foreign language. Even if the instructor speaks L1 in a broken manner and committing many mistakes, this in itself can be positive as it would: a) help students let go of their shyness and fear of failure and ultimately improve their communication skills ("if the teacher speaks broken Japanese and makes many mistakes, then maybe its not that bad if I myself speak broken English") and b) allow students to realize that when it comes to communication skills, grammatical/vocabulary accuracy is of secondary importance; having the drive to convey your thoughts in L2 (even if it's broken/mistaken) is far more important than doing it in perfect English. <p>Regardless of these and other benefits of using L1 in class, a few warnings also arose in our discussion:</p> <ul style="list-style-type: none"> - The extent of using L1 or not in a class is dependent on the class' mastery of L2. Obviously, the higher the level of the class, the less the benefits of using L1. - In certain situations, immersion on L2 might be of more importance than pragmatics, cultural nuances and even communication skills. Hence, there are occasions on which L2 only can also be beneficial even if it is a low level class. - In any case, even if an instructor chooses to use L2 only on a high level class, he/she should always try to be sensitive of the speed, accent, diction, etc. she is using when speaking and adapt it accordingly to the class' level. 	
Javier Salazar	

海外語学研修報告

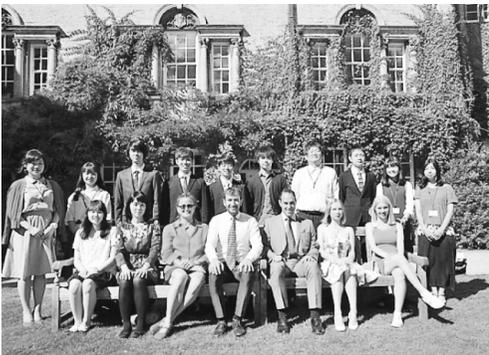
海外語学研修「英語 A」実施報告

オックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける夏期英語研修も3回目を迎えた。本年度の参加者は12名(学類生10名、大学院生2名)で、事前研修は8月11日に、本研修は8月28日から9月17日の3週間に渡って実施された。イギリスでは6月23日にEU離脱の是非を問う重要な国民投票が行われ、大方の予想に反してEU離脱派が勝利したこともあり、研修前には彼の地の世相の慌しさが心懸かりでもあったが、オックスフォードでは選挙結果の余波も感じられず、無事に研修を終了することができた。8月のイギリスは比較的天候不順だったそうであるが、幸いなことに9月に入ってから週末に若干雨となった以外好天に恵まれる日が多く、参加者の気持ちにもいっそう弾みがついたように思われる。

カリキュラムについては前2年のアンケート調査の結果を参考にハートフォード・カレッジと事前に調整を行い、基本的に月曜から木曜の午前中は様々な場面での言語活動を想定した英語の総合的学習、午後は主にオックスフォードやイギリスの文化や社会の特定のテーマに関連した実践的学習という授業構成とした。また金曜日は大英博物館やナショナルギャラリー、コッツウォルズ、プレナム宮殿などへの訪問研修を実施した。授業の最終日の9月15日には、3名ずつが協同でプレゼンテーションを行い研修の成果を確認した。過去2年では、比較文化的なテーマのプレゼンテーションがほとんどであったが、今年は指導教員の意向でそれ以外からテーマを見つけることが課題として加えられたので、「探偵小説」や「嗜癖」などいっそう興味深いテーマが揃った。前日夜遅くまでリハーサルを重ねるなど努力の甲斐もあり、一様に高評価を得ることができたことは言うまでもない。最終日の夜にはGala Dinnerという晩餐会が催され、参加者はあふれる充実感とともに研修の締めくくりの時間を大いに堪能したことと思う。

ハートフォードからは参加者に修了証書が授与されたが、それとは別に先方から筑波大に送付された参加者の総合成績とこちらが期間中に課した学習ポートフォリオの内容、さらに研修修了後に提出された英文レポートの成績をまとめて成績評価を行い、合格者に自由科目3単位を付与した。

本プログラムの特徴のひとつは、Residential Advisorというシステムで、選抜されたハートフォードの在學生2名が、寮滞在時のみならず、自由時間、訪問研修、週末など、つききりで参加者の面倒をみってくれる。今回も彼らの援助によって海外は初めてという参加者も安心して研修に集中できたと思われる。



カレッジの中庭でハートフォードのスタッフと

最後に、今年は大学の「はばたけ筑波大生」制度による旅費支援と日本学生支援機構(JASSO)の奨学金の両方を受けることも可能だったので、費用面ではかなり恵まれていたが、加えて上記の国民投票の結果急速にポンド安となり、最終的に研修費用が当初の予定より相当低く抑えられたことは、参加者にとってはラッキーだったと言えよう。

(久保田 章)

2016 年度キルギス夏期ロシア語研修について

臼山 利信・松下 聖

中央アジアのキルギス共和国でのロシア語研修は、今年度で3回目を迎えた。平成26年度に初めて実施した際は単位認定がされなかったが、2回目の平成27年度からは筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（以下「CEGLOC」）「海外語学研修ロシア語B」（3単位）として、単位認定されるようになった。今年度も同科目の枠内で実施した。

キルギス共和国は1991年にソヴィエト連邦から独立し、今年で独立25周年を迎えた。同国はキルギス人が人口の7割以上を占めるが、キルギス語とロシア語が公用語とされ、ロシア語は教育やビジネスの言語として、首都ビシュケクを中心にキルギス国内で広汎に使用されている。キルギス人の話すロシア語に訛りはあまりなく、ロシアでロシア語を学ぶのと遜色ないと言ってよい。ロシアに比べると、物価が安い、3ヵ月以内の滞在であればビザが不要などメリットもある。

今回の研修実施期間は、平成28年9月1日から9月24日までの約1ヵ月間である。研修はJICA系機関のキルギス日本人材開発センター（以下、KRJC）とCEGLOCとの共催として実施された。KRJCは、本学の学術交流協定大学であるキルギス民族大学構内にある、同国内最大の日本文化発信の拠点である。またKRJCは、人文・文化学群開設科目「海外インターンシップ」のインターンシップ先としても提携するなど、本学と密接な協力関係にある。

研修には本学学生のほかに、大阪大学、関西大学の学生も参加した。本学の参加学生は、正規課程の学生が3名、科目等履修生が1名の計4名で、大阪大学、関西大学から1名ずつが加わり、合わせて6名での研修となった。

ロシア語の授業は習熟度別に3クラスに分けて45時間、キルギス語の授業は初級クラスを全員に対して9時間、計54時間受講した。ロシア語の授業はロシア語ネイティブがすべてロシア語で行った。研修の最終課題としてプレゼンテーションを課し、「高齢化社会」、「教育」、「食文化」、「ポップカルチャー」、「大阪」、「つくば」をテーマにし、各自がロシア語で5～10分程度の発表を行った。プレゼンテーションでは、参加学生は教員と現地の大学生を前にして、ロシア語で堂々としたスピーチをし、質問にもロシア語で答えていた。約1ヵ月の研修を経て、ロシア語能力が大幅に向上し、自信のついたことがうかがえた。

語学研修のほかに、KRJCによる異文化理解講座、在キルギス日本国大使館における安全ブリーフィング、JICAキルギス事務所におけるキルギス事情講義などを受けた。またイシククリ州へのフィールドトリップも実施し、JICAによる一村一品プロジェクト（OVOP）の現場の視察、青年海外協力隊員との交流など、首都だけの滞在では決してわからない、地方特有の社会・経済的実情や現実の諸課題を学ぶことができた。

そして今回の研修の目玉は、ホームステイである。第1回目の研修からホームステイは実施していたが、第2回目までのホームステイ期間が10日間程度だったところ、今回は17日間と、研修のほぼ大半をホストファミリーのもとで過ごすように変更した。これは、毎回ホームステイの満足度が高く、参加学生のレポートからもホームステイの学習効果が非常に高いことが読み取れたからである。ホームステイでは一人で現地の家庭に入り、主にロシア語で意思疎通を図ることになる。当然、最初は苦勞するが、帰国が近づくにつれ別れが惜しくなるほど交流が深まったようである。帰国時にはホストファミリーからキルギス特産のハチミツ1kgをプレゼントされ感激したという参加者もいた。ホストファミリーはキルギス人の家庭が多かったが、中にはドゥンガン人（イスラム教を信仰する漢民族）の家庭がホストファミリーであったケースもあり、多民族国家の一端をうかがい知ることができた。

研修費用はKRJCのご厚意とご尽力により、非常に安く抑えられ、渡航費、宿泊費等込みで30万円以下におさまった。また本研修では、筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）、大学の世界展開力強化事業（ロシア）「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」に関わるJASSO協定派遣奨学金により支援ができ、参加者の自己負担費用は10万円以下になった。JASSOの経済的支援に心から感謝したい。

研修を終えて、参加学生は「さらにロシア語を勉強したい」、「留学をしたい」、「他のロシア語圏諸国へも行ってみたい」など、語学や海外留学に対するモチベーションが一気に高まったようである。今後もキルギスでの語学研修を継続し、こうした意欲ある学生を多く生み出していきたい。



少人数制のロシア語の授業風景



イシククル地方にて

平成 28 年度ロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学 夏期ロシア語研修について

2016年9月3日から9月24日までの3週間強、本学の協定大学であるロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学の協力・支援の下、同大学文学部附属ロシア言語文化カレッジにおいて夏期ロシア語研修（自由科目「ロシア語」3単位として開講）を実施し、本学から4名（人文学類1年生1名、国際総合学類4年生3名）が研修に参加した。この夏期ロシア語研修はCEGLOC開講の授業としての認定を受け、45時間の授業時間を確保して研修期間が決められる。人文社会系加藤百合准教授（CEGLOC協力教員）が引率・調整を担当し、週末や放課後などを利用して、在サンクトペテルブルグ日本国総領事館表敬訪問、日本センター訪問（所長からの講義と日本語学習者との交流）等、ロシアの文化や政治・経済情勢についての研修も付加された。

国際総合学類からの参加希望者は、ロシア語の履修経験が無くロシア語はキリル文字も読めない状態であったが、いずれも十分な英語運用能力があり、本研修参加に際しての動機が明確であり、研修において達成したい目標もはっきりしていたため、各自と面談した上で履修が認められた。（人文学類学生は、一学期間初修外国語としてのロシア語を履修しており、なおかつ筑波大学入学以前からロシア語を自習していた。）

参加者は、出発前に、危機管理研修、直前研修等数回の事前研修に参加した。上記のロシア語未習の参加者については、一学期分（10コマ）に相当するロシア語の補習授業を実施して、1.ロシア語（キリル文字）の読み書き、発音 2.初級文法についての説明（教科書・教材を配布）3.日常会話に必要な表現について集中的に学んでもらい、サンクトペテルブルグ大学のロシア語コースでの学習効果が期待できるよう事前準備を行った。

参加者全員が、サンクトペテルブルグ国立大学の斡旋によりロシア人家庭でホームステイし、生きたロシア語とロシア人の実生活を体験した。英語は使わ（え）ずロシア語だけでコミュニケーションをとった家庭が多く、ホストファミリーと毎日会話して意思を疎通したいというのはロシア語学習のさらなる強い動機となった。よく使う語彙や表現について日英対照表をつくってくれたり、家庭でもロシア語を教えてくれるなどよい環境だった。

到着翌日に大学でプレイメントテストを受け、自分のレベルにあったクラスに入り、文法、会話、発音、読解の各科目についてレベル別の小グループで授業を受けた。いずれも適正な授業を受けてロシア語力を大きく伸ばすことができた。途中で教師側からもう一段階上級のクラスにうつるよう勧められた者もあり、3週間は短期ではあるが海外語学研修の効果は目に見えるものであった。

授業外に組んで実施した研修には次のものがあつた。なおこれらの研修には、9月1日からサンクトペテルブルグ国立大学において1年間の交換留学を開始した

ばかりの筑波大生が2名（いずれも Ge-NIS（ロシア語圏諸国における産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム）プログラム生。サンクトペテルブルグ国立大学の国際関係学部、文学部にそれぞれ所属）参加した。

1. 日本センター訪問および松原斉センター長による特別講義（9月8日）

松原センター長より、ペテルブルグ郊外も含めて日系の企業が進出・展開している状況やロシア連邦内管区ごとの日本との貿易・経済協力の進展についてスライド等も利用して特別講義をしていただき、そのあとディスカッションを行った。企業就職に内定している国際総合学類の学生達から踏み込んだ質問が出ていたことが印象的だった。

2. 日本センター付属日本語教室視察、学習者との交流会（9月10日、17日）

日本センターで毎週水曜、土曜に日本語教室が行われている。教師は筑波大学出身の大平玲子先生その他数名で、生徒は日系企業に勤務するロシア人が多数を占める。授業参観後、小グループに分かれて学習者たちと交流した。数年継続して学んでいる方が多く、昨年度の本研修に参加した人にとっては「再会」となった。ロシア語と日本語の楽しさ難しさなどをお互いに語り合い、また、アニメ事情やロシアの若者の暮らしなど、興味深い話題が多かった。ここで仲良くなったため、放課後市内に移動し、カフェで続いて交流した。その後も学生さん達どうして週末など行動を共にすることがあったそうである。

3. サンクトペテルブルグ国立大学日本学科授業参加、市内研修参加（9月17日）

同学科の荒川好子先生、大平玲子先生（日本センター兼任）から、日本語の授業の対話練習相手として協力してほしいとお申し出があり、2名が2つの授業に参加した。

4. 日本総領事館表敬および福島正則総領事による特別講義（9月23日）

7月1日付で着任された福島新総領事からは、本研修日程の掉尾として、研修参加者の方から、ロシア、サンクトペテルブルグ、サンクトペテルブルグ国立大学、ロシア語授業等について、報告を聴きたいというご提案があり、各自が、研修を通じてどのようにイメージが変化したか、何を得られたか、ロシアやサンクトペテルブルグの印象、ステイ先ホームについて、など詳しくご報告した。その後総領事からモスクワやハバロフスク等の前任地と比較しながらの貴重なお話をうかがった。

帰国後10月19日（水）、G-NIS プログラム第一期生、キルギスでの夏期語学研修受講生と合同で帰国報告会を行い、サンクトペテルブルグ研修について分担して準備した報告を行った。これまで抱いていたロシアについてのイメージと、実際にロシア語、英語で自分の目で見耳で聞いて知ったロシアとの違いを実感したことを、生き生きと具体的に語っており、参加学生たちが今後のロシア語学習への強い動機を得たことがうかがえた。

* 「はばたけ筑大生」によるご支援をいただきありがとうございました。今回、国籍等の関係で JASSO 奨学金が出ない参加者が複数いたこともあり、複数の制度が併用できたことで無事実施することができました。

（文責 加藤百合・監修 白山利信）

バイロイト大学夏期ドイツ語研修について

武井隆道

今年度のバイロイト大学夏期ドイツ語研修は、8月2日から26日までの日程で実施された。

4名の学生が参加し、全員が無事帰国した。

8月の一般コースは、IIK Bayreuth (Institut für Internationale Kommunikation und Auswärtige Kulturarbeit) の主催による Sommeruni (夏期大学) のドイツ語コースである。IIK Bayreuth は、本学の研究教育協力協定校であるバイロイト大学のドイツ語教育、社会学、並びに経済学分野の代表者が1990年に設立した研究所で、バイロイト大学の関連学部との密接な協力関係のもとに、主として国際的な教育、研究活動に当たっている機関である。

本研修コースでは主として午前中に行われるドイツ語そのものの授業のほか、午後や週末にはバイロイト市内外の諸施設や歴史的遺産の見学、また市民の日常生活に接するプログラムが豊富に組み立てられており、参加した本学生にとっては、ドイツを、またひいては異文化を体験する絶好の機会になったことと思う。

海外の大学への留学は、筑波大学側の態勢整備が進んでいるが、とりわけヨーロッパの大学との交流のためには、EU 共通の言語能力基準 (CEFR) に即した授業態勢の確立、ボローニャ・システムと本学のカリキュラムの整合性の確保など、制度面での梃子入れが必要な時期にきている。CEGLOC がグローバル・コモンズ等の協力を得て、この領域で指導的な役割を担う必要がある。

フランス語短期留学プログラム（夏期・春期）報告

CEGLOC 外国語部門フランス語セクションでは、2016 年度、はじめて公式にフランスでの語学研修プログラムへ学生を送り出すことができた。

このプログラムは、フランス政府留学局 Campus France(*) との協定により、フランスの大学附属語学学校における 4 週間の語学研修プログラムへ学生を送り出し、現地での学習成果をもとに、本学の「海外語学研修フランス語 A」（夏期休業中）、「海外語学研修フランス語 B」（春期休業中）の 2 科目として、単位認定（1 科目 3 単位）を行うものである。

4 週間の本語学研修プログラムの目標は、現地フランス語研修による実践的フランス語能力の向上、および現地生活体験を通じたフランス社会や文化に関する理解、コミュニケーション能力・異文化対応能力の向上である。

2016 年度の研修日程は、夏が 2016 年 8 月 29 日（月）～9 月 23 日（金）、春が 2017 年 2 月 27 日（月）～3 月 24 日（金）であった。学生は、ホームステイまたは大学寮に滞在しながら、週 25 時間（1 日 5 時間）のフランス語授業（レベル別）を受講し、文化アクティビティに参加する。研修先は、グルノーブル大学、サンテチエンヌ大学で、学習環境、教育の質、受入れ体制の質について、きわめて優れた教育機関である。

参加者数は、夏が 5 名（グルノーブル 4 名、サンテチエンヌ 1 名）、春が 7 名（いずれもサンテチエンヌ）となった。本プログラムは 2016 年春に第 1 期生の送り出しを予定し、20 名の参加者を受け付けていたが、2015 年 11 月に発生したパリ同時多発テロ事件を受け、プログラム実施の中止を余儀なくされた。その後も依然として不安定な国際情勢が続く中、今年度の申込み数は少なくなったものの、意欲的な学生の参加を得ることができた。今年度も、夏プログラム申込み受付後の 7 月 14 日にニースでのテロ事件が発生したため、再び研修の中止を検討せざるをえない状況となったが、希望者のキャンセルを受け付ける形で、研修プログラム自体は実施することとなった。結果、当初の応募者 7 名のうち、2 名が参加を取り消し、5 名が第 1 期生として旅立った。5 名はいずれも十分な成果を上げ、帰国を果たした。帰国報告会では、研修に対する高い満足と今後の学習継続への意欲が語られた。

春プログラムには 7 名が参加予定であり、2 月初旬に事前研修を実施する。

夏・春ともに参加者全員が、平成 28 年度筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）「語学系研修等参加支援プログラム」による奨学金支給を受けることができた。

（文責：小松 祐子）

(*Campus France は、フランスの高等教育機関への留学推進活動、留学生受入れ支援、国際学術交流のために設立された、フランス外務・欧州省、国民教育省、および高等教育・研究省が所轄する公的機関であり、現在、世界 108 カ国に 175 カ所の拠点を有する。)

平成 28 年度中国語夏季短期研修実施報告

文責：池田 晋

平成 28 年度の中国語夏季短期研修は中国・湖南大学において下記の日程で実施された。参加者は計 6 名。内訳は人文学類 1 名、国際総合学類 2 名、比較文化学類 1 名、社会学類 1 名、体育専門学群 1 名であった。

なお、平成 27 年秋に成田―長沙間の直行便が就航したことを受け、湖南大学担当者との協議の結果、今後の研修には可能な限り直行便を利用することを確認した。またこのことと併せて、昨年まで上海・北京でおこなっていた研修旅行を廃止し、代わりに湖南省内での研修旅行（張家界または湘西鳳凰を選択）を実施することに決定した。

研修先 : 湖南大学（湖南省長沙市岳麓山）

参加費用 : 約 25 万円

平成 28 年度湖南大学夏季短期研修日程表

8 月 26 日 (金)	飛行機 羽田発 - 上海経由 - 長沙着
	到着後 開講式、記念写真、歓迎会
8 月 27 日 (土)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（歌曲）
8 月 28 日 (日)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
8 月 29 日 (月)	長沙市内見学
8 月 30 日 (火)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（歌曲）
8 月 31 日 (水)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
9 月 1 日 (木)	岳陽楼見学
9 月 2 日 (金)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（舞踊）
9 月 3 日 (土)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
9 月 4 日 (日)	ホームビジット
9 月 5 日 (月)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（書道）
9 月 6 日 (火)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
9 月 7 日 (水)	①～③基礎中国語
9 月 8 日 (木)	午前：試験、午後：歓送会
9 月 9 日 (金)	湘西鳳凰へ研修旅行に出発
9 月 10 日 (土)	湘西鳳凰見学
9 月 11 日 (日)	湘西鳳凰見学、午後長沙へ出発
9 月 12 日 (月)	飛行機 長沙発 - 成田着

平成 28 年度教育戦略推進プロジェクト支援事業
「トライリンガル学習充実のための e-ラーニングシステム、達成度自己評価システムの開発、および学習成果評価システム整備」
(平成 28 年 7 月～平成 29 年 3 月) 報告

CEGLOC 外国語部門では、本学学生の外国語（とくに初修外国語）習得への意識を高め、実践的な外国語能力の向上を図り、グローバルに活躍できる人材育成の基盤づくりに寄与することを目指し、平成 28 年度教育戦略推進プロジェクト支援事業として「トライリンガル学習充実のための e-ラーニングシステム、達成度自己評価システムの開発、および学習成果評価システム整備」を実施した。本事業の主な目的は以下のとおりである。

- e-ラーニングシステム、達成度自己評価システムの導入により、学生の学習環境を整備し、学生の主体的学びを実現する。
- 国際的な基準（欧州共通言語参照枠 CEFR）に則った教育目標を設定し、国際資格試験と連動させた学習成果評価システムを整備することにより、教育の質を保証するとともに、国際的互換性のある教育を実現する。

このための具体的活動として、以下を実施した。

1. 国際資格試験団体受験

ゲーテ・インスティトゥートおよびアンステイチュ・フランセとの緊密な連絡のもとにドイツ語、フランス語の国際資格試験（団体受験）を実施した。

2. 国際資格試験受験を支援する活動

国際資格試験受験を支援するための活動として、学習パンフレットの作成・配布、学習説明会の開催、資格試験対策夏期集中講座の開催を行った。

3. e-ラーニングシステムの開発

本学学習管理システム Manaba 上にフランス語国際資格試験 DELF A1 レベル対策コースのコンテンツを作成・公開し、学生の学習履歴、テスト結果を回収・分析した。コンテンツは PDF ファイルとしても作成し、印刷版をフランス語担当教員を中心に配布した。

4. トライリンガルデーの開催

トライリンガル学習の意義をアピールし、国際的な基準に基づく実践的な外国語能力習得への意識を高めるための啓発活動として、トライリンガルデーを 2017 年 1 月 18 日（水）午後にスチューデントコモンズにて開催した。スペイン語、ドイツ語、フランス語の講師および学生によるセッションが設けられ、意見交換の機会となった。

5. 報告書の作成

上記活動成果を本学教育の今後の外国語教育改善に活かすことを目指した報告書を作成し、関係者へ配布した。

(文責：小松 祐子)